

「稲富流鉄砲伝書」（大和文華館蔵）の金銀泥下絵について

泉万里（大和文華館）

大和文華館が所蔵する「稲富流鉄砲伝書」の内容は、稲富流砲術師が越前の松平忠直に伝授した慶長 17 年（1612）の奥書がある 19 帖（以下慶長 17 年本と表記する）と、年紀のない未完成の 1 帖、そして忠直自らが縁者に伝授した元和 5 年（1619）奥書の 1 帖の、あわせて 21 帖の伝書からなる。この内容は、天明 2 年の調査記録ともほぼ一致する。そして、このうち慶長 17 年本に用いられた料紙の金銀泥下絵には、絵画的構成をそなえた多彩な主題の下絵がそろそろ。下絵は料紙に付される「光、」という記号を標識とする工房で制作されたものである。

先行研究では慶長 17 年本の下絵が狩野派風であるということ、発注者は忠直の祖父家康かという指摘をうけてきた。それらをふまえながら慶長 17 年本を見直したい。

慶長 17 年本の下絵には、四季絵から源氏絵、花木図など多彩な主題の 80 ほどの図をみることができる。その最大の特徴は、切箔散らしなどを併用しない、下絵のみの装飾であること、長さ 1 メートルにも及ぶ長い料紙一枚に一図完結で描かれることである。その大きさと、破綻のない構成力は、金銀泥下絵のなかでは異例である。さらに、下絵の源氏絵は、留守模様風に人物を描かないだけでなく、言葉遊びも仕組まれた斬新な図が多いことも注目される。

そのいっぽうで、この下絵は金銀泥下絵の歴史のなかで孤立するものではない。16 世紀の連歌懐紙下絵の主題と描法を踏襲し、同時代の京都国立博物館所蔵「源氏物語画帖」詞書色紙の下絵とも主題やモチーフ、細部描法を共有する。その意味で、この下絵には保守的な側面もある。たしかに、同時代の狩野派をはじめとする華やかな金屏風や障壁面の図様の縮図かともみまがうような下絵が少なくないが、そうかといって特定の流派様式で統一されているわけではない。「狩野派的」という言葉の使い方にもよるが、慶長 17 年本を狩野派と結びつけることは適切ではない。

慶長 17 年本の制作背景について、黒田日出男氏が近著『岩佐又兵衛と松平忠直』（岩波書店・2017 年）で注目した、井伊家お抱えの稲富流砲術師の書状（「印具徳右衛門宛宇津木泰繁言上書」大阪城天守閣蔵）によって、忠直が強引に「内々に」鉄砲術の伝授をうけた経緯が判明した。この書状から、発注者は忠直自身と判断できる。

伝書の制作には料紙を整えること、本文筆写、装丁という 3 つの過程があるが、本文筆写は、稲富流内の「書物奉行」が担当したとみられる。それに対し、稲富流鉄砲伝書としては異例といえる、華麗な料紙と装丁は、伝書発給をのぞんだ忠直の意向をうけて光、工房で作られたものだろう。徳川家の紋は忠直の出自への誇りがこめられているだろうし、豪華な料紙も、後年、又兵衛の絵巻の愛好者となった忠直にとって好ましいものだっただろう。